

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 29 日現在

機関番号：37121

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2013～2014

課題番号：25884090

研究課題名(和文) 近世末期国学史の再構築 榎園社中・鈴屋社中・椎本社中の交流の様態を中心に

研究課題名(英文) The Rebuilding How Kokugaku History Had Been Developed at The End of Edo Period

研究代表者

吉良 史明(KIRA, FUMIAKI)

福岡国際大学・国際コミュニケーション学部・講師

研究者番号：50707833

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、幕末の国学結社榎園社中・鈴屋社中・椎本社中の文事とその交流の様態を解明することにより、幕末国学史の再構築を試みた。

まず始めに、本研究の軸とする幕末長崎の国学者中島広足の旧蔵資料に関してその全容を把握するために、長崎諏訪神社に伝わる資料群を調査し、学界未紹介の広足自筆稿本・手沢書入れ本等の存在を明らかにした。次に、広足と交流のある鈴屋社中・椎本社中の関連資料と諏訪神社資料に基づき、三者の文事を結び付けて論じることにより、幕末国学史の新たな一面を示した。例えば、近世後期には宣長「物のあはれを知る」説が儒教道徳と関連させて受容されており、現代的な解釈と大きく異なることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study tried to rebuild how Kokugaku history had been developed at the end of Edo period, by elucidating the literal working and interpersonal relationships between Kashizono association, Suzunoya association, and Sigamoto association. First, I reserched old material of books which Nagasaki Suwa shrine possesses, and I found that manuscripts and stock notes of Hirotari Nakashima exists. Second, I reserched the literal working and interpersonal relationships between the former three associations. As a result, there are some new aspects of Kokugaku history. Such as, "Mononoaahare wo shiru" theory was interpreted as that of political morality. It is different from the modern interpretation.

研究分野：日本近世文学

キーワード：中島広足 榎園社中 本居宣長 本居大平 橘守部 蒙古襲来絵詞 「物のあはれを知る」の説

1. 研究開始当初の背景

本研究は、報告者が今までに執り行ってきた幕末長崎の国学者中島広足に関する研究を発展させ、本居大平を始めとする鈴屋社中、さらに橘守部率いる椎本社中の文事と関連させることにより、幕末国学史の再構築を試みたものである。

本研究の申請以前に報告者が行ってきた研究は、広足と檀園社中の文事の解明のみに終始している観が否めなかった。広く幕末から明治初期に至る国学史を再考するためには、従来行ってきた長崎の地から中央を照射する手法のみならず、今までの検証から得られた知見を活かして、再度中央から地方を見据えて同時期の国学の実体を浮き彫りにする研究が欠かせないと考えるに至った。

そこで、広足と長崎檀園社中に対する研究の継続と並行して、広足との交渉の跡が見取れる鈴屋社中の本居大平・長沢伴雄・加納諸平等の国学者、さらに同じく広足に影響を与えたことが明らかな江戸の橘守部率いる椎本社中の文事を検証し、三者の事蹟ならびに文学的営為を有機的に関連させる手法を以て、新たな国学史の構築を構想した。

2. 研究の目的

本研究は、上述のごとく幕末国学史の再構築を目的とするものである。そのために、次の三段階を経て、最終目的に到達することを計画した。

(1) 檀園社中・鈴屋社中・椎本社中関連資料の書誌調査ならびにデータベースの構築

上述のとおり、本研究は長崎檀園社中と鈴屋社中ならびに椎本社中の文事を関連させて、国学史の再構築を企図したものである。

そこで、各社中の文事を検証するための一次資料の調査・収集を行い、その結果得られた書誌情報をデータベース化し、さらに解題として公開することを第一段階の目標とした。

(2) 広足・大平・守部の各事蹟を関連させた年譜の作成

次に、 から得られた情報を活用して、各社中を先導した広足・大平・守部の三者の事蹟に着目した年譜を作成し、相互の影響関係を検証し、幕末国学の実体を明らかにする際の基礎資料の整備に努めた。

(3) 鈴屋社中・椎本社中・檀園社中の交渉の模様を検証し、複数の論攷に纏める

上記(1)(2)の研究より得られた情報・知見に基づき、鈴屋社中ならびに椎本社中との間における檀園社中の交渉の模様を検証し、複数の論攷に取り纏めた。

以上の(1)から(3)の研究内容から得られた情報を駆使することにより、既存の国学史の問題点を明らかにし、その問題点を解決することにより、新たな視点からの幕末国学史の再構築を試みた。

3. 研究の方法

本研究は、従来の研究において、その実体が解明されていない檀園社中の文事に焦点を当て、さらに鈴屋社中ならびに椎本社中の事蹟と関連させる手法を以て、幕末の国学史の再構築を試みた。近世を通じて異国に開かれた都市長崎に組織された檀園社中、全国的に門戸を張り幕末の国学者に少なからぬ影響を与えていた鈴屋社中、さらに鈴屋と派を異にして独自の結社を組織していた江戸の橘守部の椎本社中、以上の三者を有機的に関連させることにより、地方から中央、さらに中央から地方を照射した幕末国学史の素描を企図した。

幕末の国学文壇において、各々異なる立場を採り、活動の拠点を異にしつつも、三者は時に影響を受け、時に他の社中を批判しており、交渉の跡が明確に見取れる。一方の視点に偏重することなく多面的かつ重層的に幕末の国学を論じるに際して、三者は格好の対象となると判断されるからである。

4. 研究成果

上述の研究目的に関して、本研究がなし得た研究成果は、以下の(1)から(3)に記した通りである。

(1) 檀園社中・鈴屋社中・椎本社中関連資料の書誌調査

(A) 諏訪神社資料の書誌調査と収集

以前の学術振興会特別研究員時代からの資料調査を継続し、同文庫収蔵の広足関連資料の全容を把握し、その大半をデジタルカメラにより撮影した。

すでに広足自筆稿本・同手沢本に関しては、若木太一・上野洋三・鈴木淳編『諏訪文庫 中島廣足自筆稿本展目録』(諏訪神社・日本近世文学会秋季大会開催実行委員会、平成十四年)が編まれていたが、本研究の調査により同目録未収録の資料の存在を明らかにし得た。その成果は、鎮西大社諏訪神社所蔵中島広足旧蔵資料解題と題して順次公にする予定であるが、同資料は現在配架番号を付与する等の整理の最中にある。そこで、その完了を待ち、配架番号等を明記した解題の公開を行うこととする。

以下、上述の『諏訪文庫 中島廣足自筆稿本展目録』未所載の資料に関して、紙幅の都合上その一部の書誌情報(編著者・書名・刊行年時等)を列記する。

- ・中島広足編『なやらひ』
近世後期成立、広足自筆稿本1冊
- ・中島広足『くさぐさの物語』
近世後期成立、自筆稿本1冊
- ・中島広足『ねおびれ言弁 / 非葛花弁略』
近世末期成立、自筆稿本2巻1冊
- ・中島広足〔文政年間雑録〕
文政年間成立、自筆本1冊
- ・中島広足『うつせがひ』
近世後期写、自筆稿本1冊
- ・本居宣長『古事記伝』
文化5年刊、44巻45冊、広足書入れ本
- ・賀茂真淵『祝詞考』
近世後期刊、2巻2冊存、広足書入れ本
- ・本居宣長『馭戎概言』
寛政8年刊、2巻4冊、広足書入れ本
- ・服部中庸『三大考』
近世後期刊、1冊、広足書入れ本
- ・荒木田久老『槻の落葉信濃下向病床漫録』
近世後期写、1冊、広足書写書入れ本
- ・荒木田久老『二の宮さき竹弁難』
近世後期写 広足書写本1冊
- ・栗田土満『神代記葦牙』
文化8年刊、3巻3冊、広足書入れ本
- ・本居宣長『弁玉あられ論』
文化13年刊、1冊、広足書入れ本
- ・村田春海・加藤千蔭『玉あられ論』
文化12年刊、1冊、広足書入れ本

(B) 椎本文庫・本居文庫資料の調査・収集

広足率いる檀園社中との交流の様子が見て取れる資料を軸として、両文庫資料の書誌調査ならびに収集を行った。本居文庫に関しては、近世後期から末期にかけて論争となっていた伊勢外宮の祭神論争関係、また椎本文庫に関しては、近世末期国学者の対外思想形成に大きな影響を与えた『蒙古襲来絵詞』関連、さらに本居宣長歌論の近世後期から末期にかけての受容を考察し得る歌論資料等を主に調査収集した。

(2) 広足・大平・守部の各事蹟を関連させた年譜の作成

上記(1)から得られた情報に基づき、三者を関連させた年譜の作成を試みた。

(3) 鈴屋社中・椎本社中・檀園社中の交渉の様相を検証し、複数の論攷に纏める

上述の(1)(2)から得られた情報に基づき、既存の幕末国学史の問題点を浮かび上げさせ、近世後期から末期にかけての国学の実体を明らかにし得る論攷の執筆、及び学会発表に取り組んだ。

(A) 幕末異国情報の伝播と長崎檀園社中

上述の学術振興会特別研究員時代からの研究テーマを発展させ、雑誌論文に取り纏めた。

始めに、肥後熊本の国学者である広足が肥前長崎の地に国学結社檀園社中を興した経緯、檀園社中の門人組織を検証することにより、檀園社中がオランダ通詞・唐通事・出島会所役人等の地役人を基盤として組織されていたこと、広足は門人の地役人を通じて別段オランダ風説書等の異国関連の機密情報を入手していたことを示し、檀園社中が情報収集能力に長けた国学結社であったことを浮かび上がらせた。

次に、アヘン戦争等の緊迫する19世紀東アジア情勢がかくて広足のもとにもたらされていたことを論じ、一連の危機的な対外情勢を把握することにより広足が危殆意識を募らせ、その結果皇国思想に基づく挙国一致を目指していたこと、加えて広足が当代の国学者に異国情報を伝達してゆく模様を検証した。結果、異国情報の発信者としての広足の姿が浮かび上がり、広足から届けられた情報をもとに、江戸の橘守部・伴信友、紀州の長沢伴雄等の様々な国学者が海防の議論を闘わせ、さらにその情報・思想を各々の歌文に表出してゆく様子を検証した。

(B) 「物のあはれを知る」説を始めとする宣長歌論の近世末期における受容と展開

以前執筆した拙稿「広足と宣長『後の歌がたり』に見られる宣長批判の内実」において、宣長『うひ山ぶみ』(寛政11年刊、1冊)に記された宣長歌論を広足が批判する模様を明らかにした。その前稿をふまえ、宣長の「物のあはれを知る」説が近世後期の国学者の間においていかに受容されていたか、広足の享受の実体の解明を軸に論じた。

その結果、現代における「物のあはれを知る」説の解釈と大きく異なる、近世期の受容の有り様が浮き彫りとなった。すなわち、現代においては文学の自立的価値を論じた説として定義される同説であるが、広足が諷諭説と関連させて論じたことに象徴されるごとく、近世においては大学八条目等の儒教道徳に結びつけて、政治道徳に及ぶ論として享受されていたことが明らかとなった。

なお、その成果は、平成26年度九州大学国語国文学会において発表しており、近く論文に取り纏める予定である。

(C)近世後期における『蒙古襲来絵詞』の復元と受容の実体

上述の(A)と同じく、特別研究員時代の研究課題を受け継ぎ発展させて、研究に取り組んだ。堀本一繁「『蒙古襲来絵詞』の現状成立過程について 青柳種信本の検討と紹介」(『福岡市博物館研究紀要』第8号、1998年3月)を参照し、近世後期に『蒙古襲来絵詞』が肥後の国学者と絵師の手により復元され、多数の模写本が製作される模様を明らかにし、その一人として広足が参与していたことを論じた。さらに、広足・守部・伴雄等の国学者が絵詞に基づきつつ蒙古襲来の折の嵐を神風と解釈する模様を示し、近世末期国学者の間における神国史観の構築に絵詞の発見が少なからぬ影響を与えていたことを示した。

なお、すでに論文として取り纏め終えており、現在学会誌等への投稿を検討しているところである。

以上、(A)から(C)を始めとして、文献調査収集から得られた情報に基づき検討を行った結果、広足が鈴屋社中・椎本社中の各人と交渉を行いつつ営んだ文事の様相が明らかとなり、既存の国学史を再構築する一階梯を示し得たかと思う。

取り分け、宣長の「物のあはれを知る」説が近世後期において儒教道徳と結びつけて解釈されていたことは、現代の我々の「物のあはれを知る」説に対する解釈と大きく異なる一面を示し、江戸時代における儒教思想の影響の強さを如実に物語る。明治以後、西洋の芸術至上主義的な文学観の延長に今日の我々の文学観は築かれていると思しく、宣長の文学観に関しても近代的な視点から評価されてきた観が否めない。その是非はしばらく置くこととしても、近世の時代思潮に即して、今一度「物のあはれを知る」説を始めとする江戸時代の文芸理念が検討されるべきであることを本研究は明らかにした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

吉良史明、幕末異国情報の伝播と長崎檀園社中(下) 語文研究、査読有、第117号、2014年

吉良史明、幕末異国情報の伝播と長崎檀園社中(上) 語文研究、査読有、第116号、2013年

吉良史明・雅俗の会、草場珮川書簡抄(二) 雅俗、査読無、第12号、2013年

〔学会発表〕(計 1 件)

吉良史明、「物のあはれをしる」の説の受容史 本居宣長以後の国学者を軸として、平成26年度九州大学国語国文学会、2014年6月14日、九州大学附属中央図書館視聴覚ホール(福岡県)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕
出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者
吉良 史明(Fumiaki Kira)

研究者番号：50707833

(2)研究分担者 該当なし

(3)研究協力者 該当なし